二人の友

芥川龍之介

僕は一高へはひつた時、福間（ふくま）先生に独逸（ドイツ）語を学んだ。福間先生は鷗外（おうぐわい）先生の「二人（ふたり）の友」の中のＦ君である。「二人の友」は当時はまだ活字になつてはいなかつたであらう。少くとも僕などのそんなことを全然知らなかつたのは確かである。

福間先生は常人よりも寧（むし）ろ背（せい）は低かつたであらう。何（なん）でも金縁（きんぶち）の近眼鏡（きんがんきやう）をかけ、可成（かなり）長い口髭（くちひげ）を蓄（たくは）へてゐられたやうに覚えてゐる。

僕等は皆福間先生に或親しみを抱（いだ）いてゐた。それは先生も青年のやうに諧謔（かいぎやく）を好んでゐられたからである。先生は一学期の或時間に久米正雄（くめまさを）にかう言はれた。

「君にはこの言葉の意味がクメとれないんですか？」

久米も亦（また）忽ち洒落（しやれ）を以て酬（むく）いた。

「ええ、ちよつとわかりません。どう言ふ意味がフクマつてゐるか」

福間（ふくま）先生は二学期からいきなり僕等にゲラアデ・アウスと云ふギズキイの警句集を教へられた。僕等の新単語に悩まされたことは言ふを待たないのに違ひない。僕は未（いま）だにその本にあつた、シユタアツ・ヘモロイダリウスと云ふ、不可思議な言葉を記憶してゐる。この言葉は恐らくは一生の間（あひだ）、薄暗い僕の脳味噌（のうみそ）のどこかに木の子のやうに生えてゐるであらう。僕はそんな

ことを考へると、いつも何か可笑(をか)しい中に儚(はかな)い心もちも感じるのである。

福間先生の死なれたのは僕等の二年生になつた時か、それとも三年生になつた時か、生憎(あいにく)はつきりと覚えてゐない。が、その一週間か二週間か前(まへ)に今の恒藤恭(つねとうきよう)——当時の井川(ゐがは)恭と一しよにお見舞に行つたことは覚えてゐる。先生はベツドに仰臥(ぎやうぐわ)されたまま、たつた一言(ひとこと)「大分好(だいぶい)い」と言はれた。しかし実際は「大分好い」よりも寧(むし)ろ大分悪かつたのであらう。現に先生の奥さんなどは愁(うれ)はしい顔をしてゐられたものである。

或曇つた冬の日の午後、僕等は皆福間先生の柩(ひつぎ)を

今戸のお寺へ送つて行つた、お葬式の導師になつたのはやはり鷗外先生の「二人の友」の中の「安国寺さん」である。「安国寺さん」は式をすませた後、本堂の前に並んだ僕等に寂滅為楽の法を説かれた。「北邙山頭一片の煙となり、」——僕は度たび「安国寺さん」のそんなことを言はれたのを覚えてゐる。同時に又丁度その最中に糠雨の降り出したのも覚えてゐる。

　僕はこの短い文章に「二人の友」と云ふ題をつけた。それは勿論鷗外先生の「二人の友」を借用したのである。けれども今読み返して見ると、僕も亦偶然この文章の中に二人の友だちの名を挙げてゐた。福間先生に

からかはれたのは必（かならず）しも久米（くめ）に限つたことではない。先生はむづかしい顔をされながら、井川（ゐがは）にもやはりかう言はれた。

「そんな言葉がわからなくてはイカハ。」

（大正十五年一月）

底本：「筑摩全集類聚　芥川龍之介全集第四巻」筑摩書房
１９７１（昭和46）年６月５日初版第１刷発行
１９７９（昭和54）年４月10日初版第11刷発行
入力：土屋隆
校正：松永正敏
２００７年６月26日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんで

す。